

《研究ノート》

G. F. Stender の『ラトヴィア語辞典』(1789)

における「畳語形式」の見出し語

田 中 研 治

要 約

G. F. Stender の『ラトヴィア語辞典』(1789) の前半部 (ラトヴィア語—ドイツ語辞典) には約30種類の「畳語形式」(別名「重複語」) が見出し語として収録されている。本稿ではその種類と用法について小規模な調査を試みる。その結果、当該形式の中では「動物 (家畜) への呼びかけ用法」が最も顕著に認められることを指摘する。

1.

ルター派の牧師 Gotthard Friedrich Stender (1714—1796) はラトヴィア (クルゼメ地方) で生まれ育ったバルト系ドイツ人 (Baltic German) で、神学を含め幅広い領域での著作活動を行ったことで知られている。彼は当時のラトヴィアにおいて、18世紀ヨーロッパの中心的革新思想である啓蒙思想の一端を担う人物でもあった。

本来彼は純粋な言語学者ではなかったけれども、言語研究の領域でも注目すべき業績を多く残している。彼の『ラトヴィア語文法』(*Neue vollständige lettische Grammatik*, 1761、1783 [第2版]) と並び、とりわけ意義深いのは本稿でとりあげる『ラトヴィア語辞典』(*Lettisches Lexikon*, 1789) である。

*2001年12月18日受理。

この辞典は後世のラトヴィア語研究やラトヴィア語（対訳）辞典の編纂などにも大きな影響を与えていることに加えて、それ自体、当時のラトヴィア語の実態を知るうえで貴重な言語資料ともなっている。

彼の『ラトヴィア語辞典』は前半が「ラトヴィア語ードイツ語辞典（固有名詞類の語彙集付き）」（*Lettisches Wörter=Lexikon*）で、後半が「ドイツ語ーラトヴィア語辞典（固有名詞類の語彙集付き）」（*Deutschlettisches Wörter=Lexikon*）の構成になった、いわゆる2言語の相互対訳辞典である。分量的には前半部が404ページ、後半部が773ページであり、彼の母語であるドイツ語を見出し語とする後半部の方が圧倒的にページ数が多い。

2.

Stenderはその『ラトヴィア語辞典』の編纂にあたって、辞典類を含む多くの文献や言語資料を参照している。また、彼自身が観察したり、収集した日常的なラトヴィア語語彙も相当数収録されている。中でも「畳語形式」は素朴で、感性的な表現に直結しているため、彼自らが日常生活を通じてそれらを記録したことが容易に推測できる。

この短い研究ノートの目的は、このような極めて卑近な語形としての「畳語形式」に着目し、使用場面や意図に重点を置いて、その種類や用法を調べることである。

これらの語彙は書き言葉よりもむしろ話し言葉としての使用頻度が顕著だと判断される。従って、特に日常生活では民衆の口から習慣的に発せられることが多く、Stender自身、視覚的にも聴覚的にも実際の使用場面に接する機会に恵まれていたと思われる語彙グループである。そして機能的な観点からすると、その具体的な使用場面はかなり特定化・個別化されていたことが予想される。

「畳語形式」(reduplication)というのは、別名「重複語」(reduplicated word)とも呼ばれるが、要するに同一語形（あるいは類似語形）の繰り返しが辞書では単独の見出し語になっている語形を指す。一般的には擬音語などの一部に相当する語形を指す。例えば、英語では *put-put*、*moo-moo*、*bow-wow*、*tittle-tuttle* などがそれに相当し、日本語では広い意味での象徴語（擬音語と擬態語の2種類があり、その例は多種多様で、かつ枚挙に暇がない）に含まれる。

ドイツ語文法では伝統的に「畳語形式」はほとんどが「感嘆詞」に分類されるようである。筆者が参照した丸山武夫『ドイツ文法小辞典』（1964）では、その観点から次のような分類がなされている（284－286ページ）。

A) 本来の感嘆詞

(1) 感覚・感情をあらわすもの (Empfindungslaut)

- a) 喜び b) 苦痛 c) 同意 d) 熟考 e) 驚き
f) 疑い g) 軽侮 h) 嫌悪

(2) 要求をあらわすもの (Begehrungslaut)

- a) 呼びかけ b) 沈黙の要求 c) 同意 d) 動物を励ます

(3) 擬音 (Naturlaut, Onomatopöie)

- a) 動物の鳴き声 b) その他の音

B) 本来の感嘆詞でないもの

本稿では Stender の辞典からラトヴィア語の「畳語形式」を抽出し、これらドイツ語式の分類と下位区分を参考にしてその用法を整理する。それについての説明は第4節で詳しく述べる。

以下においては『ラトヴィア語辞典』前半部（ラトヴィア語－ドイツ語辞典）だけを考察の対象にする。特に「2語（および3語）形式」による見出し語を中心に調査し、該当すると思われる語形に番号とページ数を付してアルファベット順に記載する。そしてそれらに対するドイツ語の説明を日本語に直して（ ）内に付記する。

なお「2語形式」の中にも、「A A」（任意の語形が単独で2個併置される場合）の他に、「AA」（任意の語形が2個連結して1語になっている場合）が少数見られる。「3語形式」においては、前者の形式だけが観察される。以下においては「AA」の形式も併記し、頭部に◆印を付ける¹。

また、以下の項目リストにおいては Ulmann の『ラトヴィア語ードイツ語辞典』(*Lettisches Wörterbuch* [Erster Theil], 1872)、および Mühlenbach-Endzelin の『ラトヴィア語ードイツ語辞典』(*Lettisch-deutsches Wörterbuch*, 4巻、1953)（以下、「M-E 辞典」と略称）に見られる説明などを参考のため[解説]中に若干引用していることをここで前以て記しておきたい。

なお特に後者の辞典は Stender の辞典に収録された見出し語の発音を推測するための有力な手掛かりとなった。

原辞典に用いられている文字表記については Stender 独自の正書法が一部見られるが、「豊語形式」などを引用して転写する際は、本稿では次のような原則に準拠している。

- (1) n, k の口蓋化音は、ŋ, k̟で示す。
- (2) 原典中のドイツ文字 (Fraktur) のうち、{ はすべて } で表記する。また横棒付きの { は } で表記する。横棒の有無については次の説明を参照。特に } (ʃ) を含む語形については、もっとも近いと思われる語形を現代語の正書法に基づいて [] の中に示すことにする。

(Stender は [š] の音を {ch で、[č] の音を tʃch で表している。また無声音 [s] の音は } で、有声音 [z] は } で表している。}ch は [č] の有声音 [ʒ] の音を表す。z の文字は [ts] の音を表す場合に使用している。要するに彼は横棒なしの } は有声音 [現代語 z, ʒ] に、横棒付きの { は無声音 [現代語 s, š] に対応させていると考えられる。辞典の232ページ参照。)

- (3) Stender 独自のアクセント記号付きの母音字 á, à はそのまま表記する。

3.

A-1 (p.5) : an an an! annin annin!

(人が鷺鳥を呼ぶ時の声)

[解説：M-E辞典には*an!*の項目を見ると、*ane! ani! anin!*などがあげてある。また、語源はエストニア語 *hani* 「鷺鳥」に由来するとある。]

B-1 (p.31) : bum bum

(人がドアをノックする時の音)

H-1 (p.84)² : hel hel hel!

(鷺鳥が穀物の中へ入って「荒らして」いる時、それらを追い払う叫び声)

H-2 (p.84) : ho ho!

(称賛の言葉)

H-3 (p.84) : hujà! hujà wilks!

(番人が狼を見た時に発する叫び声)

[解説：*wilks* 「狼」の現代語は *vilks*。 *huja huja!* の形ではないが一応ここにあげておく。]

H-4 (p.84) : hurràh hurràh

(共同して何かを応援する場合の掛け声)

H-5 (p.84) : hus hus

(豚を追い立てる時の声)

[解説：U-2の類似語形参照。]

I-1 (p.89) : inz inz!

(猫への呼びかけの声)

[解説：zは [ts] の音であろう。直後に *inze* 「猫」が見ら

れる。

M-E 辞典では *ince* と表記。Ulmann の辞典では *inzis*, *inze* は時には *minzis*, *minka*, *pinka* の形になり、「猫の名前」を示すとある。*inzis* は特に牡猫を指すとなっている。なお M-E 辞典では *pincis* は「猫の異名」とある。]

K-1 (p.108) : *ķiše ķiše* [kize kize]

(山羊を呼ぶ時の声)

[解説：現代語で *kaza* は「山羊」だが、M-E 辞典ではその呼びかけ形については何も記述が見あたらない。Ulmann の辞典には *ķis* は「猫に対する呼びかけ、また山羊を追いかう時の声」と述べてある。M-E 辞典には「猫への呼びかけ」とある。「猫」は現代語で *kaķis*。]

K-2 (p.111) : *kluk kluk*

(火酒のビンから酒を直飲みする時の音をあらわす)

[解説：ドイツ語では *kluck!* (= *gluck!*) がある。意味は① (めんどりの) コッコツという鳴き声、② (ものを飲むときの) ゴクゴクという音、または (液体を注ぐときの) トクトクという音。Stender の辞典には記してないが、Ulmann の辞典を見ると、同じ見出し語について「ドイツ語の *gluck*, *gluck* に従っている」という説明があるので、歴史的にはドイツ語からの借用語といえるかもしれない。]

K-3 (p.115) : *koŷch koŷch* [koš koš]

(馬を呼ぶ時の声)

[解説：Ulmann の辞典では対象を「特に若い馬」と断っている。Stender の辞典では、直後に *koŷchiņŷch* 「子馬、または若い馬の意味を持つ幼児語」という説明が見られ

る。M-E 辞典では動詞 *košinât* 「馬を呼ぶ」、*košinš* 「馬、子馬（幼児語）」が見られる。]

M-1 (p.166) : mik mik

(山羊を呼ぶ時の声)

[解説：M-E 辞典にはバウスカ近辺の語形 *mikulis* 「雄羊」があがっている。ただし、*mik* との関連性については記述がなく不明。Ulmann の辞典には類似語形は見られない。]

P-1 (p.213) : put put

(鶏を呼ぶ時の声)

[解説：直後に見られる *putns* は「鳥」を全般的に示す語で、「家禽」の意味もある。また「時々、四肢動物にも拡張して使われる」との説明がある。]

P-2 (p.214) : puz puz

(豚に犬をけしかける時の声)

[解説：z は [ts] の音であろう。M-E 辞典には *puc!* 「何かに犬をけしかける時の声」があがっている。Ulmann の辞典にも同じ語形 *puz*, *puz* があるが、「豚」には言及せず「犬をけしかける時の声」とだけ書いてある。]

S-1 (p.232) : ʃa ʃa [sa sa]

(犬に呼びかける時の声)

[解説：現代語で *suns* は「犬」。この形式との関連性は不明。]

S-2 (p.253) : ʃchuk ʃchuk [ʃuk ʃuk]

(若い馬に呼びかける時の声)

[解説：M-E 辞典には *šuka* 「(馬の手入れ用) 鉄櫛、若い馬」が見られ、その後に *šuku!* 「若い馬への呼びかけ」

がある。]

◆ S - 3 (p.253) : {chu{chu [žužu]

(揺り籠に合わせて歌う子守歌 [の一節])

[解説：直後に {chu{schinaht という語形が見られる。意味は「子供を寝かしつける」である。この語形は品詞的には完全に動詞化している。M-E 辞典では *žužināt* に続いて *žužu!* という語形があがっている。]

T - 1 (p.319) : tib tib / tibbu tibbu

(鶏を呼び集める時の声)

[解説：Z - 1 の項目参照。]

T - 2 (p.327) : truŷch truŷch [truš truš]

(飼い馴らされたリスを呼ぶ時の声)

[解説：直後には *trufchiŋfch* 「リス」があがっている。M-E 辞典では *truš* には「飼いウサギ、またはリスへの呼びかけ」という説明がある。直後に *trušīŋš* 「リス」の形がある。Ulmann の辞典でも M-E 辞典と同じ説明である。]

T - 3 (p.329) : tŷchuh tŷchuh [čū čū]

(若い犬や子犬を呼ぶ時の声)

T - 4 (p.329) : tŷchihku tŷchihku [čīku čīku]

(耳障りな声 [音] をあらわす)

T - 5 (p.330) : tŷchuk tŷchuk [čuk čuk]

(若い馬に呼びかける時の声)

[解説：M-E 辞典では「豚、および若い馬に呼びかける時の声」とあり、「豚」が対象に加わっている。]

◆ T - 6 (p.330) : tŷchutŷchu (behrniŋ) [čuču]

(子供を揺すって眠らせる時の声)

[解説：直後に *tʃchutʃchinaht* 「子供を眠らせる」という動詞形があがっている。M-E 辞典では *čučinât* の語形がある。その直前には *čuča* 「(幼児語) 眠り、寝所」の語形がある。]

U-1 (p.335) : *urá urá!*

(猟師が犬をけしかけたり、呼び集める時の声)

U-2 (p.336) : *uʃch uʃch!* [*uš uš*]

(豚を追い払う時の声)

[解説：直後には *uʃchinaht* 「豚のように～を追い払う」があがっている。H-5 の類似語形参照。M-E 辞典でも *ušinât* 「豚を追い払う」が見られる。]

U-3 (p.336) : *uʃgá uʃgá!* [*uzga uzga*] / *uʃchgá uʃchgá!* [*užga užga*]

([犬などにけしかけて] それ噛みつけ、噛みつけ)

[解説：M-E 辞典では「(犬に対して) 噛みつけ」の用法に加えて、「豚を呼ぶ時の声」とも記してある。また、*užgā!* 「狼に対して犬をけしかける時の声」も見られる。]

W-1 (p.360) : *wilki wilki*

(狼だ、狼が来た)

[解説：現代語では *wilki* (単数形 *wilks*)。Stender はこの W という文字は「ドイツ語と同様に、極めて軽く発音される」と述べている。Ulmann の辞典では *Ak wilki, wilki!* が収録され、「狼を呼び寄せる言葉、罵り言葉」という説明がある。]

Z-1 (p.371) : *zib zib*

(雛鳥を呼ぶ時の声)

[解説：z は [ts] 音であろう。Ulmann の辞典にも同形があがっている。類語形として *tib, tib* が見られる (上掲 T

— 1 参照)。なお *ziba* という単語の意味には「鶏を意味する幼児語」とある。（もう一つの意味は「バターを入れる木製容器」とある。）M-E 辞典には *cib* (*tib*) 「鶏を呼ぶ時の声」があり、さらに *ciba* 「素早い動きをあらわす語」、*ciba* 「鶏を意味する幼児語」が続いている。]

Z-2 (p.374) : *zuk zuk*

(豚を呼ぶ時の声)

[解説：z は [ts] 音であろう。現代語で *cūka* は「豚」。]

4.

前節では29種類の「疊語形式」を取り出すことができた。それらのほとんどが「2語形式」である。第2節でも触れたように、少なくとも Stender は彼自身の感覚を通じ、これらの形式をラトヴィア語常用語彙の一部として、あるいは慣用的定型表現として捉え、記録したことは想像に難くない。

なお Fürecker の辞典 (Fennell 版)³には上で調査した「疊語形式」が既に数種類収録されている。どの程度 Stender の辞典の当該形式とそれらとの間に共通性があるのかに関しては今後の調査が必要である。

また、前節では数カ所において、参考のため Ulmann の辞典と M-E 辞典における各々の記述を簡単に比較したわけであるが、このような個別的な語彙資料の項目同士を今後は詳細に突き合わせてみる必要があるだろう⁴。さらに現代語の辞典とも対比すれば、言語的事実の他に、文化的含蓄、微妙な意味変化などが浮かび上がってくることが期待される。そしてそのような情報は《連続的語史》の解明に役立つ可能性を含んでいるといえるだろう⁵。

話を再び「疊語形式」にもどす。ここで改めて全体を眺めると、29種類のうち20種類の「疊語形式」が明らかに動物を対象とする呼びかけの用法を持つこ

とがわかる。第2節で引用したドイツ語の「感嘆詞」の分類に従えば、それら20種類は「本来の感嘆詞 (A)」の下位区分のうち、(2)の「要求をあらわすもの」に相当する。(例えば、何かある対象に向かって「何かをすること求める」とか、あるいは「何かをしないことを求める」などはすべてこの用法に属する。)特にその中でも、「a) 呼びかけ」と「d) 動物を励ます」という2つの下位項目にそれらの用法が集中しているといえよう。

「呼びかけの用法」としては、多くの身近な動物が対象であることが特徴といえるであろう。また、その対象となる動物はほとんどが家畜に属するものである。中でも「犬」、「豚」、「馬」、「鶏」、「山羊」は複数の「畳語形式」による呼びかけが可能だったことがわかる。「犬」を何かにけしかける時の形式は3種類認められるが、これらは「動物を励ます」用法に属しているといえるだろう。なお当時は「リス」が家畜のように飼育・馴らされていたことも興味深い。

対象となる動物によって、呼びかける語形が異なっているのは「畳語形式」の機能がそれだけ個別化し、かつ表意性が高かった、即ち、個々の新しい語彙素としての資格をかなりの程度に獲得し、特定の使用場面がほぼ確立していた結果だと考えられる⁶。また、呼びかけの対象となる動物の名詞形がもとになって派生したと思われる形式もいくつか見受けられる⁷。

その他に、「呼びかけの用法」をやや広く解釈すれば、「動物への励まし」と平行してH-4のように「人間への励まし」もあれば、S-3やT-6のように「人間の行動を促す」用法もある。これらの「子供を眠らせる時の声」はどちらの形式とも「AA」のタイプになっているのは偶然であろうか。(なお筆者は「人間への強い威嚇」の用法などを予想していたが、これらは見られない。)

また、W-1 (およびH-3) の形式は唯一動物名を直接使用した例であるが、いうまでもなく「狼」という動物への純然たる呼びかけではなく、文脈的には「周囲への呼びかけ (注意喚起)」の機能を果たすと見るべきであろう。

B-1、K-2、T-4のような純粋な擬音語も少数であるが含まれているこ

とがわかる。なお B-1 の擬音語については Stender の辞典には説明が欠けているが、どうやら本来はドイツ語起源の擬音語のようである。なぜなら、Ulmann の辞典では *bum* は「ドイツ語の感嘆詞 *bum* である」と明記してあるからである。

Stender の辞典には実際このようなドイツ語起源の語が相当入り込んでいると考えられている。ただそれらについては、彼は Ulmann のように断っていないため、それらは本来のラトヴィア語なのか、借用語なのかという点において、当時の使用者を戸惑わせていたかもしれない⁸。なお彼の辞典に散見される、このような不備や、その他の問題点の指摘は既に Zemzare によってなされている⁹。

バルト系ドイツ人の Stender は生まれつきドイツ語話者であった。しかし同時にラトヴィア語にも精通した二言語使用者でもあった。彼のラトヴィア語の観察や記述には、そのような彼自身の言語環境や言語能力がなんらかの点において反映していると考えられないだろうか。

筆者はそのような影響関係は、良かれ悪しかれ、あるいは大なり小なりありうと思う。その問題は見方を変えれば、Stender 個人の言語生活面においてのみならず、当時のラトヴィア社会においても日常的であった複数言語使用や言語接触の諸現象を検証することにもつながるのではないだろうか。いわば歴史的な語彙資料を通じて見られる言語接触の実態の解明であり、当然その背後には文化接触という重要な考察テーマが控えていることも見逃してはならないだろう。そのためには彼の辞典の後半部（ドイツ語－ラトヴィア語辞典）や、同時に彼の『ラトヴィア語文法』や他の著作の内容などをも視野に入れ、できるならば社会言語学的方法論を積極的に取り入れた調査と考察を進める必要があるだろう。

註

1. 「A A」形式の類似形式として、「A A'」のような形も見られる。例えば、*wirfchu warfchu* / *wirfsche warfsche* 「すっかり混乱した」のような、いわゆるアプラウト方式の疊語形式である。ただし、今回は調査の対象を「A A」の形式に限定したので、「A A'」形式は取り上げていない。
2. Hの文字について、この辞典の説明には次のように記してある。「本来ラトヴィア語にはHの文字は存在せず、ラトヴィア語とは異なった音節（即ち、ラトヴィア語的でない単語のことか一筆者）を構成する際に使用される。また少数の感嘆詞においては、文字の形を伴うだけである。」（84ページ）。推測するところ、Stenderには絶えずドイツ語の言語体系や用法が念頭にあったのではないか。「（ラトヴィア語とは）異なった音節において（ad dilatandam syllabam）」と断っているのはやはり母語ドイツ語が意識されていたと思われる。ラトヴィア語には存在しないHの文字をここに収録したのもその意識の現れではないだろうか。
3. 17世紀末頃書かれたと思われる写本が現存。最近、T.G.Fennellによってその写本が文献化された。詳しくはT.G.Fennell（1997, 1998, 2000）による諸文献を参照。
4. 例えば、Stenderの辞典に収録された見出し語がUlmannの辞典では未収録の場合があったり、またその正反対のケースが見られるからである。
5. V. Rūķe-Draviņa（1977）は、年代的に隔たりの大きい、異なった辞典同士の比較を通じて、語彙資料の意味変化などを考察したり、また慣用句や定型表現の推移を検討する手順を簡略に示している（例えば、15章「語彙の増大」、16章「慣用句の変化」など参照）。
6. 下宮忠雄によってオノマトペの単語化（語彙素化）には3つの段階があることが提唱されている（下宮 [2001] : 45-49ページ）。「疊語形式」に関してもこのような段階説に基づく検討が可能かもしれない。例えば、上例中、B-1、K-2は第1段階の語形であろうし、S-3に関連する動詞形 *schufschinaht* や、T-6の動詞形 *tschufschinaht* などは第3段階に属し、完全にラトヴィア語の共時的語彙体系（ここでは動詞体系）の中へ浸透・定着している語形であるといえようか。

ついでながら、外来語が借用語として当該言語の文法体系、語彙体系中に安定した地位を得るまでの過程についていえば、言語によっては多少の差があるかも知れないが、一般的にはそこでも最低3段階のプロセスを経ることが指摘できるだろう。即ち、接触～順応～同化融合の各過程である。（例えば、ラトヴィア語における英語借用語の受容過程の諸段階に関しては Juris Baldunčiks: *Anglicismi Latviešu Valodā*, Rīga: Zinātne, 1989 ; 『ラトヴィア語における英語借用語』で展開されている説がそれである [5-34ページ]。)

7. I-1、K-3、P-1、S-2、T-1~2、Z-1~2などの語形がこれに相当する。派生の方向としては、動物の実体を意味する名詞がもとになっていると考えるのが妥当であろう。まず対象とは必然的な関係のない何らかの音形が存在して、それが次第にある特定の動物への呼びかけなどにアト・ランダムに転用されたとは考えにくい。例えば、*kofchinfch* は「子馬、または若い馬」を意味する幼児語であるが、この形がもとになって *kofch kofch* が派生したと考える方が自然であろう。
8. 例えば、Sehwers (1953) の第1章 (Alphabetisches Verzeichnis der deutschen Lehnwörter im Lettischen) に収録してある <A> および <Ä> で始まる語 (82語) を調べると、その内19語が Stender の辞典にも記載してある。なお Stender は *aktiņu doht* (*Achtung geben*) という動詞句の場合だけ、これが deutschlettisch (ドイツ語風ラトヴィア語) だと断っている。
- ちなみに、*aktiņu* の原形 *aktiņš* は中期低地ドイツ語 (Mnd.) *achtinge* からの借用語であると考えられる (S. Jordan [1995]: 53ページ)。
- Stender が収集したドイツ語起源の借用語については D. Zemzare (1961: 182ページ) <Aizguvumi no ģermāņu valodām (ゲルマン語からの借用語)> の項目参照。
9. Stender の辞典に関連したその他の問題点については Zemzare (1961) の175-184ページにかけて批判的見解が種々述べられている。
- 例えば、見出し語中には彼が慎重な調査をしないで収録したため、当時既に廃語になっていた語まで含まれているとか、Elvers (1748) と Lange (1772-77) の辞典 (ドイツ語-ラトヴィア語、ラトヴィア語-ドイツ語) を参照した際、そこからの語例の引用が正確でないとか、その他の言語資料から引用する時にも自分勝手な修正を施している、などの指摘がなされている。

(上記註8、9で言及した Zemzare [1961] の貴重な研究書は村田郁夫先生 [東京経済大学] の蔵書から拝借したものである。ここに記して厚く感謝する次第である。また、Stender の辞典中のラテン語については吉田育馬氏のご教示を得た。厚く感謝の意を表したい。)

参考文献

I. 原典

Stender, G. F. 1789. *Lettisches Lexikon in zween Theilen*. Mitau: J. F. Steffenhagen.

II. その他

Fennell, T. G. 1997. *Fürecker's dictionary: the first manuscript*. Rīga: Latvijas Akadēmiskā Bibliotēka.

——— 1998. *Fürecker's dictionary: the second manuscript*. Rīga: Latvijas Akadēmiskā Bibliotēka.

——— 2000. *Fürecker's dictionary: a Concordance*. I & II. Rīga: Latvijas Akadēmiskā Bibliotēka.

Jordan, S. 1995. *Niederdeutsches im Lettischen*. Bielefeld: Verlag für Regionalgeschichte.

丸山武夫 1964. 『ドイツ文法小辞典』 東京：研究社

Mülenbach, K. 1953. *Lettisch-deutsches Wörterbuch*. (Redigiert, ergänzt und fortgesetzt von J. Endzelin.) I-IV. Cikāgā (Chicago): Cikāgas Baltu Filologu Kopa. (1923—32年にかけてリガで出版された原辞典の Reprint: M—E 辞典と略称)

Rūķe-Draviņa, V. 1977. *The Standardization Process in Latvian——16th Century to the Present*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International. (翻訳：田中研治・訳 1998. 『ラトヴィア語の標準語化過程——16世紀から現在まで——』 神戸：六甲出版)

Sehwers, J. 1953. *Sprachlich-kulturhistorische Untersuchungen vornehmlich über den deutschen Einfluß im Lettischen*. 2. Aufl. Berlin: Erich Blaschker.

下宮忠雄 2001. 『ヨーロッパ諸語の類型論』 (学習院大学研究叢書33) 東京：学習院大学

Ulmann, C. C. 1872. *Lettisches Wörterbuch*. (Erster Theil. Lettisch-Deutsch Wörterbuch.) Riga: H. Brutzer.

Zemzare, D. 1961. *Latviešu vārdnīcas (līdz 1900. gadam)*. Rīga: Latvijas PSR Zinātņu Akadēmijas izdevniecība.

Summary

A Note on the “Reduplicated Headwords” in G.F.Stender’s *Lettisches Lexikon* (1789)

Kenji TANAKA

In this paper, about thirty different kinds of Latvian reduplicated headwords are extracted from G.F. Stender’s dictionary *Lettisches Lexikon* (1789) with a view to examining their usage on the basis of function. The most salient contextual function of those headwords can be pointed out in the use as set phrases intending to call various sorts of domestic animals.